

教職大学院院生 M.T さんの感想

本シンポジウムから半月後には、自分が小学校の現場で教壇に立っているということ意識しながら参加させていただきました。私自身自殺についてこれまで深く考えたことはなく、自分からは遠い場所で行われているものという認識がありました。しかし、近年小学生が自ら命を絶つニュースがメディアで大きく取り上げられていくにつれ、「小学校教員としての自分は何をしていくことができるか」と考えなければならないと思っていました。

シンポジウムの中では、阪中先生の「自分の心の SOS だけではなく、友人の心の SOS に気づき助けてあげられるような子どもを育てていくことが必要」という言葉が強く印象に残りました。私はこれまで、児童が自分の居場所がないと感じているとき、教師がその居場所になってあげることができればいいという認識をしていました。もちろんこの考え方は大事だと思いますが、実際に学校で子どもが一番多くの時間をともにしているのは教師ではなく、周りにいる子どもたちです。いざというときに心の支えになるものがあれば、それは誰であってもいいこと、教師や親には相談できないことであっても、友達になら伝えることができる悩みがあることなど、教師が自らの手ですべてを解決しようとするのではなく、子ども達とも協力しながら居場所を作っていくことができればと考えさせられました。必要に応じて信頼できる大人につなげていく子どもたちとの関係を作っていきたいと思います。

小学校段階での自殺者は異校種と比べればこそ少ないですが、それでも毎年自ら命を絶ってしまう児童がいます。また、小学校での児童とのかかわりは、中学校以降の行動にも直結するはずで、小学校段階だからこそできるかかわりを考え、「自分や命を大切にする気持ち」の大切さを伝えていきたいと思います。